

病院の実力

～神奈川編 106

病院の実力「肝臓がん」 医療機関別2015年治療実績 (読売新聞調べ)

医療機関名	全手術(人)	腹腔鏡手術(人)	ラジオ波治療(人)	肝動脈塞栓療法(人)
北里大	66	43	91	251
横須賀共済	58	16	4	110
横浜市大病院	50	0	112	79
東海大	49	2	60	89
県立がんセ	41	0	112	198
湘南鎌倉総合	30	5	58	65
聖マリアンナ医大	28	6	28	136
横浜市市長総合医療セ	27	9	70	199
国・横浜医療セ	27	5	18	63
横浜市立みなと赤十字	27	5	8	95
昭和大藤が丘	26	8	2	55
横浜市立市民	23	2	15	64
湘南藤沢徳洲会	22	0	3	99
関東労災	20	0	9	32
藤沢市民	20	1	5	58
日本医大武蔵小杉	20	3	3	11
市立川崎	19	0	—	61
昭和大横浜市北部	18	7	6	26
横浜労災	15	0	3	17
相模原協同	15	0	2	54
済生会横浜市南部	13	0	38	49
横浜旭中央総合	12	0	12	16
県立足柄上	11	0	3	16
海老名総合	11	0	0	7
川崎市立多摩	9	0	4	74
横浜南共済	8	0	16	20
厚木市立	8	0	9	17
川崎市立井田	7	1	0	20
川崎幸	7	1	0	8
伊勢原協同	5	0	17	19
横浜賀市立うわまち	5	0	4	9
国・相模原	5	1	2	35
国際親善総合	3	0	4	4
東海大大機	2	0	24	37
山近記念総合	2	0	4	18
横浜新緑総合	2	0	0	15
新百合ヶ丘総合	1	0	31	17
大和市立	1	0	12	15
菊名記念	1	0	8	6
平塚共済	1	1	0	24
東戸塚記念	0	0	0	3
茅ヶ崎市立	—	—	4	10

「国・」は国立病院機構、「セ」はセンター。「—」は無回答または不明。

今回の病院の実力は、「肝臓がん」を取り上げる。一覧表では①全手術(他のがんから転移した肝臓がん含む)②腹腔鏡手術③ラジオ波治療④肝動脈塞栓療法(いずれも患者数)——を掲載した。全手術は開腹手術と腹腔鏡手術の合計人数を示した。治療は、がんの個数や大きさ、肝臓の機能を踏まえて選ぶ。手術は最も効果が高いが、肝機能が悪

肝臓がん

い患者は対象外だ。近年、腹腔鏡手術が広がりつつある。ただ、肝臓は出血しやすく、手術が難しい。腹腔鏡も保険適用になっていくが、各医療機関で安全性や有効性を確かめながら慎重に導入している。ラジオ波治療は、画像で確かめながら、肝臓に針を刺して、がんを焼く。がんの個数や大きさの制限はあるが、体への負担が少なく、高齢で持病があったり、肝臓の機能が悪かったりする患者も受けられる。

肝臓がんの主な原因はウイルス感染だ。ウイルス性肝炎やアルコールを定期的に飲む中で、がん



川崎市立川崎病院(川崎市川崎区) 市東昌也 消化器外科部長

乏しい自覚症状 定期検診を

肝動脈塞栓療法は、肝臓に栄養を運ぶ動脈に細い管を通し、セラチンなどで血管を塞いでがんを死滅させる。塞ぐ前に、抗がん剤を注入することも多い。がんの個数が多くても行える。

がんの数、大きさとで治療選択

肝臓は沈黙の臓器と呼ばれ、症状が進行しないと自覚症状が出にくい。原因の多くは肝炎ウイルスによる。血液検査で感染の有無を調べ、感染していれば、ウイルス除去の治療を受けながら、定期的に肝臓の状態を確かめることが大切だ。

肝臓がんは再発するケースが多く、転移もある。再発した場合も先の3本柱で対応する。肝臓は予備能力が大きく、正常な状態から7割切っても生きられる。肝臓の機能が保たれていることが、いい治療といえる。

患者さんの中には10年以上診ているケースもある。例えば最近亡くなった80歳代の男性患者は、最初の手術から十数年間診続けた。その間、手術を2回し、ラジオ波焼灼術や肝動脈塞栓療法も数回行った。再発の場合も、採血したり、超音波・CT・MRIなどの検査を組み合わせた早期に発見し、すぐに治療することが重要だ。自覚症状に乏しい肝臓なので、手術後もやはり定期的な検査を受けてほしい。

肝臓がんを治療する場合、①外科手術②ラジオ波焼灼術③肝動脈塞栓療法は主に放射線科が担当する。当院の特色は内科、外科、放射線科の垣根が低く、常に医師がタイアップして治療に臨むことだ。この科に顕微鏡で診断する病理診断科も加えた4科合同のカンファレンス(症例検討会議)を、毎月実施している。

全国の調査結果は「くらし健康」面に掲載しています。次回1月8日「血液がん」の予定です。